JICA 草の根技術協力事業

「南部における科学的根拠に基づく患者中心の保健サービス向上：

大学と医師会の連携イニシアチブ」

2017 年国内研修　報告書

主催：福島県立医科大学

研修地：埼玉県（国際疫学会）

２０１７年８月１９日―２３日

はじめに

ベトナムホーチミン市で毎年行われている疫学研修に参加されている、ホア先生とチュン先生の日本国内研修のアテンドを行った。期間中、先生方の研修が充実した時間となるよう、滞在中のサポートをし、そして、東南アジアに興味はあったが、まだ行ったことのない国ベトナムの先生方との文化交流を行った。同行した研修先は、第 21 回国際疫学会総会(IEA WEC2017)、福島総合衛生学院での疫学講義、川越町観光である。以下、毎日の研修の様子を報告する。

8 月 19 日（土）

さいたま市のホテルロビーで、ホア先生とチュン先生と待ち合わせた。お着替えや荷物をホテルに預けるなど学会会場出発前サポートをし、大宮駅西口の会場（ソニックシティホール）へ移動。後藤教授と合流し、レジストレーション後、オープニングセレモニー、全体講演、全体シンポジウムに参加した。

オープニングセレモニーでは、優雅な日本太鼓と書道パフォーマンスを鑑賞した。書道で書かれた漢「疫学」の意味について触れたことから、私達全員の名前の意味を交換し合った。秋篠宮妃紀子殿下が参礼され、ベトナムと日本での皇族の敬称が違うことについてとホア先生、チュン先生から教わり、お互いの国の違いについて知ることができた。

総会講演と総会シンポジウムでは、福島県立医科大学安村教授を始め、ACC study 、JPCH、JMS コホート研究など、日本での様々な疫学研究があること、アジア地域で懸念されている健康問題（インドの foeticide、日本での認知症の増加）などについて述べられた。疫学に期待されていることは、Health Life Expectancy と Total Life Expectancy の向上と、Social Expenditure の減少であると説明があった。

8 月 20 日（日）

午前

シンポジウム 1 に参加。

福島第 1 原子力発電所の事故による、健康被害について、福島県立医科大学の後藤教授を含め 4 名の先生方の発表をホア先生チュン先生と聴講した。その後、ブラジルの周産母子保健や、メンタルヘルスなどいくつかの講演を聴き、国内外、様々な分野の疫学の研究に触れることができた。

昼食時セミナーは 4 部屋にて別々のテーマで行われ、ベトナムの先生が選ばれた、大迫研究(Ohasama Study)を 4 人で聴講した。家庭血圧を測定することの大切さ、白衣高血圧（教授回診高血圧）の実在、長期的家庭血圧測定には、患者と医師の良い関係構築が大切であることを学んだ。

学会長との記念撮影

午後

フランスの、Cancer data for cancer action、がん登録についてと、韓国とスペインの方の携帯電話の脳への影響についてのシンポジウムに参加した。

夕食時 後藤教授と先生方のミーティング会食に参加した。先生方の今後のベトナムでの研修や研究についての話し合いの中で、iPad でベトナムの地図をお見せすることができた。

8 月 21 日（月）

午前

深夜まで先生方はベトナムのお仕事や翌日の講義資料作成で深夜まで作業されていた。この日が国際疫学会総会に参加できる最後の時間であり、昼に先生方と学会会場合流となった。

私は、初めて行われたアジア 3 カ国（日本、韓国、台湾）合同疫学セミナー参加した。テーマは、健康関連ビックデータベースの疫学研究への利用・活用法であった。その後、東日本大震災後の若い世代の自殺リスクや、スマトラ沖地震 3 年後の災害に対する意識調査など、自然災害と健康被害に関するシンポジウムに参加した。

この日の昼食時セミナーは 2 ヶ所のみであったため、会場は参加者で満席だった。先生方と 3 人で、循環器系疾患へのデータの実用化についてのセミナーに参加した。とても混んでいたため私がお弁当を取りに行き、先生方には先に会場に入っていただいた。

午後は、それぞれ関心があるセッションに参加した。私は、チュン先生と循環器疫学の、北海道の壮瞥町研究や中国での血圧の研究を、その後、大学での前期授業の微生物学でインフルエンザウィルスについて学び関心があったため、インフルエンザ疫学研究を聴講した。隣接するもう一つの会場建物へ移動し、子宮頸癌ワクチンと、緑茶の癌予防効果、台湾の研究者のピロリ菌と膵臓癌の関連についての研究を聴講させていただいた。メンタルヘルス分野では、祖母のメンタルヘルスの孫の発達への影響や、父がいない家庭で育った子のうつ病について短時間であったが、英国の研究を聞くことができた。

学会参加を通して感じたことは、疫学研究は様々な分野があること、積極的に質問がされ、研究者の同士が、お互いの研究がより良いものとなるようアドバイスをされていたことが印象的だった。日本が開催国であったので、日本の事象に注目した研究を主に、アジア地域の研究、日本ではなかなか聞くことができない欧米南米の研究に触れることができた。研究をされたご本人や、日本人にとっては既知である情報も、海外の方にはわからない研究背景もあるため、聞き手が誰であるかによって、情報を追加しながら話す必要があると感じた。

疫学研究は、様々な面から人々の健康を支え、基盤となる医療研究であると再認識した。ベトナムの先生方は、専門の内分泌系疫学研究、研究方法に関するシンポジウムに参加され、ベトナム国民の健康ために有益な情報を得ようとする、意欲的な姿勢を拝見し、大変刺激を受けた。

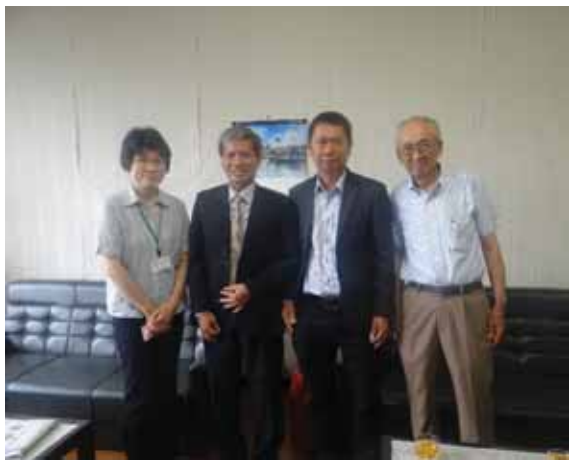
ポスターセンションでは、トータル 555 の研究が掲示され、その中で栄養士の方の発表が興味深かった。親戚やご近所の方から野菜や果物をいただく方の野菜と果物の摂取量調査である。ベトナムの先生と食事を共にし、日本と同じく米が主要な食べ物であり、パンより米がお好みで、魚も肉もお好きであった。欧米文化の影響のあるベトナム南部在住の先生方なので、ステーキもお好きであることを知った。アメリカに行かれた時のステーキのお話しや、5 年前に福島県に研修で来られた際、二本松市の菊人形を鑑賞されたことを知り、私自身も大菊 3 本仕立てに挑戦したことがあったため、先生の菊人形展の感想を伺うことができ、楽しいひと時であった。

8 月 22 日（火）

午前

ホテルから福島県へ、ホア先生とチュン先生をお連れし、新幹線で移動した。後藤教授とホア先生、チュン先生の打合せに同行し、福島県県庁国際課を訪問し、挨拶をさせていただいた。

その後、福島衛生学院へ移動し、先生方の講義を聴講した。講義の内容は、疫学と生活習慣のつながり、ベトナムの文化と生活習慣、基礎疫学（横断研究）、基礎統計（エクセルでのデータ管理）であった。教員も参加してくださり、ディスカッションの時間もあり、学生のみなさん熱心に参加していた。



午後

福島県から埼玉県さいたま市川越町へタクシーで移動。

福島駅で福島県立医科大学看護学部 2 年早川さんと合流し、駅構内に展示されている、福島わらじ祭りの大わらじや、飯坂町けんか祭りの山車を見ていただいた。米を主食とされているため、わらじに使われている藁をすぐお判りになり、ベトナムには祭りが３０００種類程あることを教えてくださった。

新幹線内でお弁当を食べ、車窓からの風景から、ベトナムの風景との相違点などについて会話させていただいた。日本と似ている田園風景であるが、ベトナムにはもっと川や沼地多いこと、そしてそこに居住を構えている家族は、洪水被害に遭うと引っ越しをするので、小さい家に住んでいることを教えてくださった。大宮駅から川越町へタクシーで移動し、運転手の方から川越町の成り立ちの説明があり、先生方へ通訳した。喜多院では、御参りを体験していただいた。約 60%が仏教のベトナムの方々は、日本と同じように寺院参拝をされるが、日本よりたくさんの願い事を、たくさんの線香を焚いて参拝されると伺った。手を合わせる時は、日本と違い、蓮の花のように膨らませ、仏様を優しく包むようにすると教わった。日本との違いを知り、さらにベトナムに興味をもった。

その後、蔵造りの素晴らしい町並み、菓子屋横丁を散策し、特産品の紫芋から作られた作りたて芋けんぴを食べていただいた。ベトナムでもサツマイモを食されているとのこと、とてもお気に召され、芋けんぴなどをご家族へのお土産に購入されていた。喜んでいただいて私達も嬉しく思った。夏の装いの浴衣姿の人々が多く、商店の漢字の屋号看板や、木材建物、ラムネなど、多くの物事に関心を示されていた。

8 月 23 日（水）

ホテルから、大宮駅出発の成田空港行きバス停まで先生方をお連れし、お見送りをした。

研修を通じての感想

今回の研修を通し、様々な方に出会い刺激を受けたことは私にとって大きなメリットであった。公衆衛生学や疫学は、治療の研究ではなく、発展途上国など特定の地域の環境問題と人々の健康問題の関連分析と考えていた。人々の健康回復の勉強をしており、日本に住んでいる自分には身近でないのかもしれないと思っていたが、今回の研修を通し、その認識が間違いであったことに気付く事ができた。

世界各国で調査されているが、まだまだ必要とされている国があり、国によって社会・生活・文化背景などから、必要な調査内容が幅広く、サンプルによっても、研究者の着目するデータ項目によっても、考えが多岐に渡ることがわかった。

発表された研究者の多くの方が、まだたくさん行わなければならない分析があると述べておられたこと、また、学会会場にて、他大学で疫学を学び始めたばかりの先生とお話をさせていただく機会があったことからも、疫学は今後注目されていく分野であると思う。

福島総合衛生学院では後藤先生の通訳の下、ホア先生とチュン先生が英語で行った講義にて、学生の方々が最後の質問タイムで、自発的に英語で質問をされていた。疫学技法だけでなく英会話も同時に学ぶという、予測しなかった、双方向に効果のある試みであったと実感した。そして、学会での公式言語は英語であったため、多くの学生が日本にいながら英語力を向上させることができれば、より多くの専門的情報を収集でき、将来の福島の医療の発展につながると思う。このために、英語で看護や医療を学ぶ機会が増えることを期待したい。

ホア先生、チュン先生から、疫学を人々のために活用するためのアドバイスをいくつかいただいた。知識を深め、分野を定め、英語力の向上、そして疫学に Biostatistics を統合して研究することも興味深いことであると教わった。今回の研修を通して得ることができた学びを、地域の人々の健康維持増進に貢献できる調査に将来つなげられるよう、日々学習に励んで行きたい。

報告者
國分和美（福島県立医科大学看護学部２年）